

隱岐の祭祀組織抄

上井久義

隱岐の島前は、西島・中島・知夫里島からなつており、そこには四〇近い社がある。島後にもまたこの数に近い社があると思われる。中には延喜式に名を連ねる神社もあるが、その多くは村の素朴な社である。近年まで何某神社と云う名前すら持たなかつたものさえある。たとえ名は無く

遠くの人に知られずとも、そこには村人と共に育ち伝えて来た古い伝承を持つものが多い。神社の信仰が、ある一部落に限られているだけに、その神と人との関連は密接で、親しみある神としてその宗教活動が続けられてきた。しかし新しい文化が波及すると、生活に直結した物質文明ほどの変化でなくとも、古い伝統的な信仰は徐々に変貌しはじめられるのである。隱岐のような島では、特に舟の出入の激しい港町ほど、その変貌の度合が著しかつた。しかし一年神主の存した古い形態をわずかに偲ぶことはできるし、又ヨコヤの形態も残存しているのを見ることが出来る。

これに対して、隱岐の島後に於ては、新しい文化が浦々から滲透しても、島前にくらべて島が大きいせいか、交通に不便な島の内部の部落には、古い祭祀形態である宿役の

伝承にふれることが出来る。

そこで次にこれらのいくつかの神社を通じて、隱岐の祭祀組織の一端を記して見たいと思う。

一、一年神主

島前の海士村で最も開けた町は、隱岐汽船の寄港する菱である。これから一軒ほど南に福井と云う部落がある。島にしてはかなり広い水田が続く農村で、ここには宮田神社がある。村人の中には、菱の町は、今ではなかなか栄えているが、以前は漁業を営むわずかの家があつただけで、社も宮田神社の分れであると云うものもいた。宮田神社の祭日は、古くは二月六日と七月六日と十一月六日に行つていた。しかし農繁期に祭が重なるので昭和二三年頃から田植のすんだ七月一七日に祭日を変更している。

福井は現在四一戸あり、これが一組から四組までの四つの組に分れている。以前は郡崎組(下組)・中組・上組の三つであつたが、終戦後に中組の戸数が増加したので、これを二組・三組の二つに分け、郡崎組を一組・上組を四組

として現在に至っている。この四組の者が、順番に一年間ずつ当番となつて、氏子総代のもとに神社の守をする。

氏子総代は、年長者から四人選ばれたが、現在は選挙によつて選び、その期間も四年と定められている。しかし四年たつと再び選ばれてその役を続ける場合が多いと云う。

当番になつた組は、二月二八日にお宮の正月の準備のため早朝お宮の掃除をし、注連縄を作り、ゴクを掲ぐ事からはじまつて、翌年の一月二七日迄の神社の仕事一切を受け持つのである。当番の家では、正月の準備も神社の準備が整つてからでないとかかれないのである。

この様な組の組織は、この村に移住すれば誰でも入る事の出来る開放的なもので、これを統括する氏子総代の組織と共に、都会のどこの神社でも見られそうな新しい組織である。これは一世代前までは、ランプや行燈さえ使わず、水を入れた盥にアカシガイと云う石の鉢を入れて、この中でコエ松を燃して明りをとつた生活をした所とは考えられぬほどのものである。これも恐らく菱浦の急速な発展に促がされて、村の祭祀組織にまで大きな変化を来したものである。しかもここには神主に相当する者もいないために、祭の日には、菱から神主に来てもらわねばならないのである。このような例は隠岐でも恐らく最も新しい型に属するものと考えられる。

同じ海士村でも中里の諏訪神社では、部落約八〇戸の内一二戸が順番に当番として祭の手伝いをする点は福井と類似するが、ここでは禰宜が居て祭祀に當つている。旧暦の

六月二八日と九月一九日が祭日であつたが、大正一二年頃からは新暦の七月二三日に改められた。

この神さんは片目だったので、氏子もよく見ると皆んな片方の目が小さいと云う。この伝承は、天目一神・一つ目小僧・片目の魚等と一連のもので、隠岐にもその一例のあつた事が解つたわけである。

禰宜のことを一年神主とも云つているが、一年間勤めると神主が変わるわけではなくて、毎年引続いて藤谷氏が禰宜を勤めている。したがつて一年神主と云うのは名前だけで、実際は一般の禰宜と変わる所がない。昭和一二年以前は上野氏が代々禰宜を勤めていた。しかし古くは特定の家の者が代々禰宜職を継いで行くのではなくて、一年神主が片目の神を祭つたのが中里での祭りの姿であつたと思われる。

一年神主は、知夫の波止でも聞く事が出来た。ここでは氏神さんの一年神主が、男世帯だけの参加のもとに、旧暦の一〇月二八日にクジによつてきめられる他に、エビスさんの一年神主が、旧暦の一月一〇日に女世帯の者も参加してクジできめられるのである。一年神主になつたからと云つて、神社の掃除や祭りの準備をするぐらいのもので、何ら司祭者としての仕事はないが、これになつた年はげんがよいと云つて村人達はクジに當る事を喜んでゐる。これは祭祀を、舟霊信仰として広く崇拜された焼火神社の官司の松浦氏に委ねる様になつたために、格式ばつた祭祀にはほど遠い部落民から選ばれた一年神主は、その司祭者としての地位を退いて、神主さんの手伝いをするのがその職務で

あるかの様に考えられる様になつたものと思われる。以前はやはり部落から選ばれた一年神主が中心になつて、ささやかな村の祭りが行われていたのであろう。

二、御幸祭とヨコヤ

村のお祭を、その氏子の中から選ばれた者によつて司祭せず、見識の高い神事によく通じた大きな神社の神主に委ねると云うのは、波止だけでなく西島の全社に見られるのである。調査のために別府に着いた七月二日は、丁度海神社のお祭であつたが、村民は祭の準備を整えて、松浦氏の来るのを待つてゐる。したがつて、この一帯の神社の司祭を担当する焼火神社の宮司さんは、七月の祭の時期になると多忙をきわめ、一日の余裕すらもない。昔は各社の祭日はばらばらで、それぞれの部落によつて行われていたのであろうが、現在では司祭を松浦氏に委ねてゐるために、祭日も各社が重ならぬ様に順番になつてゐる。

祭のほとんどは舟渡御を伴う御幸祭である。海神社は別府から海岸線を一軒ほど東北に行つた場所であり、七月二〇日に、御輿が青年に担がれて、別府の舟着き場近くに設けられたオカリヤに舟で運ばれる。その夜はオカリヤの前に特別に作られた舞台で、隠岐神楽が演ぜられる。二一日は、夕方四時頃から再び若者によつて御輿が担がれ、部落の中心となる道路を行き来した後に舟で社に帰る。

ここで注意を引くのは、オカリヤを設ける場所である。現在は舟着き場のすぐ近くの公民館の前に設けられてゐる

が、昔は別府にヨコヤが居て、公民館をやや山手上つたヨコヤの屋敷内に設けられていたと云う。これは海神社の場合だけではない。物井のお宮も、御輿は山を一旦降り、海岸線を西に添つて物井の部落に入り、ヨコヤに設けられたお旅所に行くのである。一四・五年前にヨコヤは絶えてしまつたが、お旅所の場所だけは昔のままである。

小向の高田神社も、隣り部落の船越にヨコヤが居て、ここにお旅所がある。現在では海岸添いに御輿が行くが、昔は船渡御であつた。このヨコヤは別府のヨコヤと親戚であつたと云うが、大正年間に絶えてしまつた。大津のお宮も、ヨコヤは隣り部落の市部にあり、ここがお旅所となつてゐる。宇賀と蔵谷の部落は、半里も北に離れた所にお宮があり、二つの部落が交互に祭をする。ヨコヤは宇賀にあつたが一四・五年前に絶えて様子がわからない。美田尻の八幡神社は、二五年ごとに遷宮式があり、その度に本殿と拜殿が交互に修理される。この遷宮祭の時には御輿が出て十景の浜から舟で大山に渡る。ここにも昔はヨコヤがあつたと云うのである。知夫村にも同じ様な例が存在する。

これらの例から考えられる事は、各神社のお旅所は、ヨコヤの家に設けられていたのではないかと云う事である。しかも祭の日には、神社では御輿が出る時と帰る時に、祝詞を奏上するぐらいで、行事のほとんどはお旅所を中心に行われる事を思えば、以前は当然このヨコヤが祭の中心となつて各神社ごとに祭を取り行つたのであろう。このヨコヤは、現在ほとんど伝えられていないが、島後では、ヨコ

ヤは祭の前の七日間を精進けつさいし、食物を調理する火も、家族の者とは別にした。これも段々薄れて、現在は一日だけになつてしまつた。この様にヨコヤに重い物忌が課せられていたのも、現在の祭の形式になる以前には、ヨコヤが司祭者であつた事を示すものと思われる。ヨコヤはほとんどの神社に存在したから、以前は各神社の祭日がまぢまちであつてもさしつかえがなかつたのである。

またこの他に注意される事は、一般に神社は、一部落に小さいながらも一社ずつ存在するのが普通なのであるがこの島では二つの部落が一組になつて一つの神社を祭り、しかも一方の部落に神社があり、他方の部落にお旅所があつて、祭には御輿がこの二つの部落の間を往復すると云う型が多く見られる事である。これはお旅所のある部落の多くが、海岸線に近い集落の立地に恵まれた場所にあるに反し、神社の位置は、やや山手に入つた集落の立地条件に恵まれていない場合が多い点から考へて、その原型は、物井の部落に見られる様なものでなかつたかと考へられる。すなわち神社はやや部落を離れた山間部にあり、祭の日には部落の中で祭祀に携わるヨコヤが、自分の屋敷にオカリヤを設け、村人達が御輿に神をのせて、神社から部落のオカリヤに神をお迎えし、ここでヨコヤを中心としたお祭を一晩中行つた後に、あくる日に再び神社まで御輿でお送りしたのである。

ところがこの様な思想が薄れて来ると共に、たまたま神社の近くにひらけた場所でもあると、ここにこの神社を中

心とした部落が成立したのが、小向や大津の場合であつたと考へられる。ただ大山だけは八幡神社のお旅所の近くに渡神社と云う小さな神社がある。しかしこれは美田尻の神社が八幡信仰と結合してやや特殊化し、大山部落のオカリヤへ毎年舟渡御が行われぬ様になると共に、美田尻の部落が別府の港を背景にした恵まれた土地だけに発展して、八幡神社が美田尻だけの氏神として考へられる様になつてしまつたので、大山には社が必要になつたものと思われる。大山の神社を渡神社と云うところにも、裏にこの様な経緯が感じられるのである。それぞれの部落に社が成立すれば各々独立した神社として部落を守護して行く様になるのである。そこで八幡神社のお旅所だけは昔のままの形で受け継がれたために、大山には渡神社があるにもかかわらず、このすぐ横にお旅所が設けられると云う一見奇妙な形になつてしまつたものと思われるのである。

三、宿役とその祭祀

神社のお祭が御幸祭の形態をとるのは島前の島々だけでなく、島後に於ても見られる。特に五箇・中村・磯西の祭は大い。元来この祭が舟渡御であるところからも、海岸に近い神社にその例が多い様である。しかも近年になつて、舟渡御のない神社にも、この祭の様式が取り入れられて行く様である。海岸からやや山間部に入つた部落では、舟渡御は出来ないが、神社から御輿をかついで、新たに設けられたお旅所に御幸し、あくる日に再び神社に帰る祭で

ある。いやが上にも祭り気分を盛りたてる御幸祭のにぎわいが、長い伝承の間に固定化した厳格な規則に縛られた儀式よりも好まれたのかもしれない。しかも各部落の神社がまとめて合祀される傾向にあるから、各部落に伝えられた個性ある伝承は姿を消し、真剣な神事から、楽しいお祭へと変化している様である。

しかし少し交通に不便な部落に足を踏み入れると、各部落の神社が合祀される以前の、古い隠岐の信仰に触れる事が出来る。ここには部落に神主やヨコヤに当るような定まつた神職はおらず、部落民の内で宿役と称するものによつて祭が行われているのである。

宿役によつて祭祀を行つていた所は、飯田・大久・有木等の部落であるが、近年はほとんどその姿を消してしまつた様である。そこで次にかつて宿役が行われていた姿を、有木に例をとつて記して見る事とする。

有木は西郷町から北に約三軒ほど隔つた場所であり、有木川に添つて約八〇戸ほどの農家が建ち並んでいる。この有木川のとりに建てられた公民館を境にして、上流の約四〇戸を上組、下流の約四〇戸を下組、と二つの組に分れている。その各々の組がまた約二〇戸ずつの上組と下組に分れている。この二〇戸の内、八戸がお祭の時に宿をする権利を持つ宿役の家である。したがつて組の者はどここの家でも宿役をするわけには行かず、昔からこの八軒にきまつていたと云う。

一般の家と宿役の家との間には、少しの違いもないが、

宿役の家は全般的に、この部落の旧家と考えられている家である。この八軒の宿役の中から、祭の宿をする家をクジで定めるのである。宿は上組と下組が一年交代で行う。したがつて今年の上組の宿役の者の中から一軒の宿になる家が定ると、来年は下組から宿が選ばれるのである。クジに当り宿になると、神さん田の経営がまかされる。この田は部落民の共同耕作で、ここで收穫された米で祭をする。旧暦の一二月にはヒキウスと云つて、宿の家で直径八寸ほどの大きなボタモチを作り、田の耕作に当つて来た者に振舞うが、これがあまり大きいので、無理に食べる様子が、とても滑稽であつたと云う。

祭の日は旧暦の二月丑の日である。それが後に新暦の三月一〇日になり、現在では各部落が一せいに祭をする様になつたので、三月一五日が祭の日となつた。

宿役の者は、祭の準備に必要な仕事を部落民に振り当てる。仕事の当番の事をナンドと云う。ナンドの者は、祭の二・三日前に、宿役の家で大蛇にたとえた藁の縄を作る。頭と尾の部分が八つに分れている所から、八つ頭と呼ばれている。八つ頭は、宿のオモチの上の間から下の間にかけて作られた台に置かれる。この台には八つ頭の他に、米、酒、オシトギ、弓、矢が並べられる。オシトギは、椿の葉の上のせてあり、一つの三方の上一二個人入れておく。これは後で神社に持つて行つて配つた。

祭の日になると、昼前に宿の者が、今年宿をせぬ組の宿の内から、宿役の者だけを招くのである。これをお客さん

と云つてゐる。宿ではまず丸餅の入つた吸物が出される。続いてカクサン（各々の吸物椀）でお酒をいただく、この時に宿では酒の肴は大根のコーコだけしか出さぬ仕来たりになつてゐる。これがすむと、一同は、楽人会の人々の奏する音楽を先頭に、八つ頭・弓・矢・オシトギを持つて後に続くのである。弓と矢だけは、宿役以外の家の者は絶対に持てない事になつてゐる。

神社は部落の端より有木川を少し北にさかのぼつた場所にある。ここには小さいながらも笠形をした美しい岡があり、その麓に形ばかりの祠が立てられている。この前の境内は非常にせまい。その傍に二本の大きな杉の木と、櫛が生えている。一行が神社に着くと、ここで田植式が行われる。これはお客が袴に白足袋はだしの姿で、田に見たてた祠の前の境内に立ち、田植歌に合せて、苗に見たてた小さい幣を植えて行くのである。この植える人は男であるが早乙女と云う。早乙女が苗を植えている間に、粟の種がばらばらと蒔かれる。神社に持つて来た八つ頭は、境内の櫛の木に、頭を上にしてぐるぐると巻きつける。この神社の祭は、上の上組と下組、下の上組と下組の二つの組になつて行われる。したがつて上と下の二つの八つ頭を、重ねて一本の櫛に巻きつけるわけである。これがすむと、一行は弓矢を持つて再び宿に帰る。

ここで再び酒が出た後に、お客になつた宿役の者の中より、クジで次の宿をきめるのである。次の年の祭には、今年宿をした組の宿役の者達が、お客さんとなつて招かれる

わけである。新しい宿がきまると、ここで一同は一旦解散する。夜になると、新しく宿にきまつた家の者が提灯を持つて、前の宿の家に行き、祭に使う弓と矢を迎えて帰る。

山の神の宿役の他に、一切講の宿役がある。一切講の場合は、二つの組の一方がお客になる様な形態はとらず、一つの組に一軒の宿がきめられ、この宿の家に、この組の者が集まつて来るのである。したがつて、二つの組が交代で宿をするのではなく、一つの組の中の家が、クジで当つた家から順番に宿をつとめる。しかも一切女は関係せず、料理の煮焚から酒の爛まで、男だけで行事である。

旧暦の九月一六日になると、組の者が氏神さんに参拝し午後一時頃には宿に集まつて来る。この日に宿では次の宿をきめるクジを作つておく。宿に集まつたものは、まずカクサンで二回お酒をいただく。お酒は、オクジだからと云つて、一同は手を洗つてからいただく。続いてクジ引きがある。クジを引く者は、一週間も前から家族の者と火だけは別にする。日常生活に使つた火を一旦けして、新しく付けた火で調理をした物を食べなければならぬと云う、一種の物忌の期間がある。クジを引く権利は、組によつて多少違いがあり、旧家だけに限られてゐる所と、全部の家が参加出来る所とがある。クジの引き方は、一通り集まつた者が全部宿をすませると、次の年には全員でクジを引く、するとその次の年には、前年度に宿をした者はクジを引かないで、他の者だけで引くのである。したがつて一通り宿が当たるまでは、宿に当つた者からクジをどいて行くわけ

ある。山の神の宿の場合は、二年目に再び同じ宿が当る事もあるが、一切講の場合は、これに参加する家が一〇軒あれば、一〇年間に一度宿をすればよいわけである。

クジがすむと、再びカクサンで三回お酒をいただく。ここで儀式ばつた空気はくだけ、宿の家から思い思いの御馳走が接待される。この時ばかりは飲み放だい、食い放だいとなる。

御神体は、毎年宿役をつとめた者の名を記入した帳面を入れた小箱に、榊を添えて縛つたものである。平常はいつも床の間にかざつておく。新しい宿がきまると、クジに當つた者が御神体を持つて自分の家に帰る。この行列には御神体を持つた新しい宿の主人を先頭に、太鼓と幟が続く。宿のクジに當つたこの主人には、神さんが来られた印に、顔に炭をいつばいつける。前の宿で飲めるだけ飲んで来たのであるから、全員はまつたくちどり足で、御神体を持ち帰るだけで精一杯である。その上に新しい宿につくと前の宿から酒二升を持参して来て一ぱい飲むのである。この頃には、もうとつくに日は暮れている。翌日は、祭に使用する道具送りが行われ、一同に酒が振舞われるのである。

以上の様な宿役をめぐる民俗には、かなり注意すべきいくつかの問題が含まれている様である。まず上組と下組に分れた二つの組が、相互に有機的な関連を持つて、一つの祭祀組織を形成している事である。多くの綱掛や綱引の行事に見られる例では、神社の祭に二つの組に分れて行われる場合が非常に多い。綱引きにはこの二つに分れた組の者

が引き合うわけである。勝つた方の部落の稲は、その年は豊作だと云う。この様な場合には、二つの組の存在が、より一層明瞭に分離の傾向をとる。この様な一般の場合では行事そのものは、二つの組ともまつたく同一で、相互の組の間には競争心が働きあうと云う点と、互に一つの神社の祭を行つている点に、二つの集団の関連性が認められるにすぎない。所が隠岐の場合は、単に二つの集団に別れて年占いな行事を行うのではなくて、相互が不可欠の存在で宿役と客と云う有機的な関係を、一年交代で繰返しているのである。年占いの要素を持つた綱引行事は、神事から変化して、競争心が強く表面に押出されて発展したものであるから、神事の本来の姿は、もう少し他の所にあつた様である。して見れば二つの組に分れて一つの祭をすると云う以外の理由があつたものと思われる。すなわちそこには宿と客と云つた形に似た有機的な関連のあつた事が考えられるのである。お客さんとは、云うまでもなくまれびとの事である。しかも宿の者は、祭に際して、その準備をととのえ場所を提供するだけで、行事はむしろ客が主体となつてとり行われるのである。すなわち宿の者が中心となつて一方の組の者が、他方の宿役の者をまれびと神として迎え歓待した後に、このまれびとを中心として神事が行われると云う形態が考えられるのである。ここに古代のまれびと信仰の片鱗を伺う事が出来るのではなからうか。

一切講の場合は、宿の主人自身が祭祀を司つたものと考えられる。神を迎える家の主人が、その印として顔に炭

をつけるが、これは祭の日に相手の顔に炭をつけ合う行事と、一連の意味を持つものである。各地で行われているのは、その本来の意味は忘れられ、単に一つの行事として伝承され、ときに面白半分の子供によつて行われる場合すらあるが、隠岐では神を祭る者の印として行ふ点に注意される。島前の別府の部落では、正月一四日のトンドさんの時（今は六日）に、女房が男達をおわえて（追つて）炭や糊をつけてまわつた。これをイワウと云つてゐる。そう簡単に祝われてはかなわないと、男達が逃げまわるのが面白く、大変なそうぞうしさだつたらしい。これは平常なかに加つて社会的な地位が重視される男達に、この時ばかりはと云う気持も手伝つて、本来の意味から離れたものになつてはいるが、炭をつける事を祝うと云つてゐる様に、炭をつけるべき人間を祝うと云う意味があつたのである。そしてより古くは、宿役の主人の場合の様に、その人間が司祭者になつた事を祝うためのものであつたと考えられる。

この様に考えて見ると、これは女性が祭の時にする化粧と、同じ様な意味を持つものと考えられる。炭の場合は真つ黒になつて、化粧の様な美しさはないが、炭を塗つた人間が、日常の俗なる世界に生きる人間ではなくて、神聖なる祭に携わる人間である事を示さんとしたのであろう。

神事として八つ頭と、弓、矢を神社に持つて行くのは、各地に見られる綱掛の神事と同じ内容である。ただここでは、弓と矢を宿役が持つて行くだけで、これで射る事はない。しかし本来は、やはりこの弓は射るために持つて行つ

たものであろう。現在でも、部落によつては、弓神事を伝えている所もあるようである。その場合は当然お客がこれを行つたと思われる。

しかしここで特に注意される事は、現在すでにその姿を消している隠岐の島後の神楽の内、あばれる鬼に向つて巫女が弓を射ると、これが鬼の面の上に出た部分に突きささり、鬼は悶えながら楽屋に引きさがるると云う神楽が夜中に行われる事である。この神楽は、隠岐島前の神楽の中にも見られず、恐らく島後に行われた特有の神楽であつたと思われる。しかも巫女が弓を射ると云う例は、あまり知られていない古い伝承を伝えるものと考えられるのである。

現在の神事では、神主や当屋の当人、または宿役の者によつて行われた弓神事が、かつては司祭者としても高い地位を占めていた巫女によつてとり行われた場合もあつたのではないかと考えられる。平安朝以前の地方の神社で、祭の日に国人の中から選ばれた巫女が、神域で動物犠牲に關連のある行事を行つており（拙稿「生贄の説話」民俗一卷二号）、弓神事の源流は、この動物犠牲にあると考えられる所から巫女が動物犠牲としての弓神事を行う場合に、巫女自身が神聖なる犠牲獣に弓を射る場合もあつたであらう。

動物犠牲の意味は、ハリソンが、「テミス」―芸術と祭式の起源―等で述べてゐる様に、犠牲獣をたべる事によつて神聖なる動物の持つ聖なる力を、人間達が得て、それによつて新たな力の復活を行うところにあつたのであるが、隠岐では復活の力の源泉たる犠牲獣は、長い伝承の内に姿を

変え、犠牲獣を食べ合う代りに、その場に持つて行つたオシトギを、祭に参加した全員にくばつて食べる様になつていたのである。岡山に、藁の鹿の腹の中に握飯を詰めておき、この鹿を弓で射てからみんな握飯を食べ合う神事があるが、これも犠牲獣としての鹿が、徐々に握飯と云う形に変形しつゝある事を示すものである。

祭の日に神社に持つて行く八つ頭は、大蛇に偽定されているが、各地で行われている綱掛行事も、綱を蛇と考へている場合が多く、これを弓で射て退治するのだと云う伝承を持つ所もある。しかし藁の蛇を矢で退治する行事だと云つておきながら、綱そのものに弓は射ず、的になるものに添える場合が多い。また綱掛の場合には、鳥居や、神木と考へられる木に綱が掛けられる。これは、この綱の本来の意味が注連縄であつたからである。祭の日には、神の依代たる神木に注連縄をしてその神聖性を示し、また鳥居につけて、祭に際して鳥居内が特に神聖な場所である事を示す役目を持つわけである。弓神事の場合には、かつては聖なる力に溢れた犠牲獣の神聖さを示す所にあつたのである。ところが犠牲獣そのものは姿を消し、弓で射る対象が、ある場合は藁の鹿となり、また単なる猪の供え物となり、遂には的にまで変形してしまつたわけである。そこで注連縄としての綱が的に添えられる結果となつたのである。有木の場合では、弓を射る行事が無くなつてしまつたので、この注連縄としての八つ頭は、神の依代としての櫛に巻きつけられる様になつたものと考えられる。

弓神事と田植祭が、一つの祭りとして同時に行われているのであるが、これについてはいくつかの考へがあり、その説明は他の機会に譲る事とするが、簡単にその意味の源流と考へられるのは、動物犠牲が人間達が新しく復活するための神聖な力を得るためのものであつた様に、新たに種をおろされた稲が、犠牲獣の持つ神聖な力を得て新しく復活する力を備え、再び豊かな実りが約束されると考へた所にあつた。田植式の時に、男の宿役の者が植えるにもかかわらず、この人達を早乙女と呼んだのは、この儀礼の本来の姿が、女性によつてなされた事を示している。とすれば、宿に集まるお客さんも、本来は女性であつたのではなからうか。田植式に蒔かれるのは粟であるが、他の各地のオランダ祭と比較して見ると、粟を蒔く例は少なくほとんどの場合は粃の場合よりも古い形式を伝へていると考へられる場合が多い。恐らく粟の場合も、稗と同じ様に、粃を蒔く様になる以前からの様子を伝承して来たものと考えられる。農耕儀礼が、単に稲だけに限らず、もつと素朴な農耕である稗や粟の場合にも、同じ様な様式を持つた儀礼が行われた事も考へられ、隠岐の、稲米儀礼以前の農耕とその儀礼の片鱗がうかがえて面白いのである。

以上は昭和三年七月下旬に、民俗調査のために隠岐を訪れた際に採集したものの一部である。なおこの際に色々とお世話になつた隠岐島調査団の先生方及び鳥前焼火神社の官司松浦氏に心からお礼申し上げます。